研究ノート

恋愛の場としてのカフェーの成立
——1920年代のカフェー言説を通じて

堀内 直央

はじめに
第１章　「カフェー＝恋愛」の前夜
第２章　青年のカフェー通いという社会問題
第３章　素人として欲望される女給
おわりに

〈凡例〉引用資料は適宜新字体に改めた。

はじめに

現代において歓楽街を歩けば、必ずといってよいほど、ラウンジ、キャバクラ、ガールズバーなど、女性従業員による接待をサービスとして提供する飲食店が目に入る。本稿が対象とするのは、その源流たる「カフェー」である。大正期から昭和初期にかけて隆盛したカフェーは、珈琲を中心とした軽飲食を提供する現代のカフェと異なり、雇用した女性従業員に男性客を接待させることで人気を集めていた。

これまでの先行研究としては、新興風俗としてのカフェーのあり様を文化史、地域史の視点からとらえようとするもの（野口 2018; 斎藤 2020; 篠原 2023）[1]、公娼制度や売春史の文脈でカフェーを論じるもの（藤目 1997; 小谷野 2007; 小野沢 2010）、カフェーで働く「女給」[2]に焦点をあてその表象を通史的に分析したもの（小関 2023）などがあるが、本稿と問題関心を共有するのは、恋愛に焦点をあてながらカフェーを論じた寺澤優の研究である（寺澤 2022）。

[1] 本文記載の文献の他、参考文献表に記載した山路勝彦の一連の研究など。

[2] 「女給」という呼称はカフェーの増加に伴って定着したものであり、カフェー黎明期には必ずしも「女給」と呼ばれていない場合もある。ただし、本稿では混乱を避けるため、カフェーで働く女性を全て「女給」とする。

寺澤は、従来の研究においてカフェーの隆盛の理由が、モダンさや安さ、気軽さにのみ求められていることを批判している（同: 203）。曰く、店主との自由契約で就業するカフェーの女性には、藝娼妓にはない「自由」が認められていたために、カフェーは同時代に要求されるようになった「自由恋愛」の疑似的な実践の場として成立した（同: 246）。そうした「疑似恋愛」が女性の「自由意志」によって執り行われているという仮面が、女給が性の商品化を強いられていることを不可視化し、他者の介入をより困難にしたというのが寺澤の主張である（同: 255）。

寺澤の述べるような、カフェーが恋愛の場として認められていたという主張は同時代の文献にも確認することができる。社会評論家の室伏高信は、『中央公論』1929 年 2 月号に掲載された「カフェ社会学」という論考において、以下のように述べている。

> 日本のカフエは、自由恋愛の場所である。家庭の桎梏を破壊した若き日本の女性と、売女の奴隷的職業的に満足することのできない日本の青年とが、カフエにおいて自由恋愛を実践する。〔中略〕自由恋愛は、今日では最早や如何なる空想でもなくして、一つの実践、経済的基礎のうへに立つた、一つの実践である。日本のカフェは正にその最高の場所である。（室伏 1929: 191）

女給が「奴隷的」に性を売買する必要のない職業であるゆえに、カフェーは「自由恋愛」の「実践」の場として成り立っているという主張である。

このようにカフェーを恋愛との接続によって説明しようとする発想は、他の先行研究にも共通している。ジェンダーの視点から近代日本の恋愛を論じた田中亜衣子が、「女給による濃厚なサーヴィスによって、『恋愛気分』が味わえるカフェーが急増」（田中 2019: 203）したと述べている他、小谷野敦は「売春を悪とし、自由恋愛を称揚する議論」が活発になったことによって、遊郭に代わって「疑似恋愛の場としてのカフェ」が栄えたのではないかと論じている（小谷野 2007: 173）[3]。

以上のような先行研究のなかで、寺澤の研究の意義は、カフェー流行の原因として「恋愛」を取り上げるだけではなく、カフェーにおける「疑似恋愛」を、女給に働く強制力を不可視化するものとして取り上げ、自由恋愛論に批判的視座を加えたことにある。本稿は寺澤の成果を引き継ぎながら、女給への強制力を不可視化してしまう、カフェーが恋愛の場であるという発想が、どのように成立したのかをより深く検討するものである[4]。着目するのは以下の二点である。

---

[3] その他にも、斎藤光は九鬼修三がカフェーを論じる際に用いた「異性的特殊存在様態」という語を引用しながら同様の結論を導いており（斎藤 2020: 153-5）、小関孝子は「客たちはカフェーの女性たちとの疑似恋愛を楽しんでいる」（小関 2023: 55）と説明している。

[4] 本稿が明らかにしようとするのは、カフェーにおける実態ではなく、言説レベルでカフェーや女給が社会的に（特に男性論者）にどのように認識されていたかであり、すべてのカフェーで女給と客が恋愛関係にあったことを主張するものではない。

第一に、カフェーを恋愛の場とする言説は、どのような過程を経て形成されたのか。寺澤は形成過程については深く言及しておらず、また分析の中心は 1930 年代である。先の室伏の記述のように、1920 年代後半にはカフェーは恋愛の場として語られるようになっている。そこに至るまでの言説の形成過程を追うために、カフェーが誕生した 1910 年代から 1920 年代のカフェー言説を対象に、カフェーについて何がどのように語られていたかを分析する必要があるだろう。

第二に、カフェーが人気を集めたのは「恋愛」の希求だけで説明できるのか。この点について寺澤は、女給が自由契約であったこと、必ずしも客と性交渉に至る必要がなかったことを根拠にしながら、女給に認められていた一定程度の「自由」が「自由恋愛」を可能にし、それゆえに「自由恋愛」を求める男性客がカフェーに集まったと結論づけている。しかし、第 3 章で確認するように、同時代には女給が自由ではないという認識も広まっていた。であるならば、「自由」であることは、カフェーが人気を集めたことの理由として不十分なのではないか。

本稿では以上の問題関心のもと、1910 年代から 1920 年代におけるカフェー言説を分析する。同時代のカフェーと恋愛をめぐる議論には、近代日本の恋愛論がはらんでいた矛盾が映し出されている。こうしたアプローチは、現代の恋愛規範を歴史的な文脈から読み解くうえでも示唆的であろう。

本稿の分析対象はカフェーにまつわる言説であるが、説明の便宜を図るために、ここで簡単にカフェーの変遷を整理しておく[5]。カフェーが日本に誕生したのは 1910 年代である[6]。1911 年、東京で最初のカフェーとなった「カフェー・プランタン」が銀座に開店した[7]。同時期には、「プランタン」は多くの著名人を顧客に抱える、文化サロン的な位置づけの店であった。同年に「カフェー・ライオン」「カフェー・パウリスタ」が開店し、カフェーは徐々にその軒数を増やしていった。カフェーの増加に伴い、当初のサロン的な雰囲気は薄まってゆき、学生やサラリーマンなどの庶民も利用する大衆的な雰囲気の店も増えていった。大阪においてもカフェーはおおむね同じ経過をたどっていた。文化人を主な顧客とするカフェーが 1910 年代初頭に開店し、軒数の増加とともに大衆化、1910 年代後半には労働者階級も頻繁に利用する場所となった（村嶋 1929b: 179-80）。

1920 年代、カフェーはさらに軒数を増やしていく。東京では 1923 年の関東大震災によってカフェーの多くが罹災したが、それでもカフェーの増加は止まらなかった。第 3 章で詳述するが、1925 年には東京と大阪を対象に、行政によるカフェーの労働実態調査が行われるなど、社会問題としても注目を集めることになる。

---

[5] 本稿が分析の中心とするのはカフェーにまつわる言説であるため、地域の別なく史料を参照するが、史料の限りゆえ、第 1 章と第 2 章では、東京のカフェーにまつわる史料が中心になることを先に述べておく。

[6] 以降の時代整理は、注記がない限り、野口孝一『銀座カフェー興亡史』（平凡社・2018 年）と和田博文「エッセイ・解題 関連年表・参考文献」『コレクション・モダン都市文化 第 12 巻 カフェ』（ゆまに書房・2005 年）を参考にしている。

[7] ただし、それ以前にもカフェーに類する形態の店がなかったわけではなく、例えば台湾喫茶店やビヤホール、ミルクホールなどは存在していた。

1930年代、カフェーはさらに頻繁にメディアでも取り上げられるようになる。1930年には「エロ」を前面に押し出した大阪のカフェーが東京に相次いで出店することになった。これまでにない業種のカフェーが開店するのと同時並行的に、カフェーで働く女給を題材にした小説や映画が多く発表されるようになったのも 1930 年である。小関孝子は「カフェーとは別個の存在として『女給』が描かれ」る「女給ブーム」が、「女給の記号化」を促進したと説明している(小関 2023: 166)。しかし、法規制や日中戦争の影響でカフェーの勢いは徐々に衰えていく。

以上の変遷をふまえ、本稿ではカフェーと恋愛を接続する言説が 1920 年代には存在していたことを念頭に置きながら、黎明期から 1920 年代までのカフェー言説を分析する。第 1 章では、「カフェー＝恋愛」という認識が成立する以前に、カフェーがどのように語られていたのかを明らかにするために、1910 年代のカフェー言説を分析する。第 2 章では、1920 年代前半を対象に、カフェーが恋愛として語られるようになる過程を明らかにする。第 3 章では、「自由恋愛」とは異なる観点で、カフェーに人が集まった理由を明らかにするために、1920 年代後半の女給像に着目して分析を進める。

第1章 「カフェー＝恋愛」の前夜

本章では、1910 年代のカフェー言説を取り上げる。同時代にはまだカフェーと恋愛を直ちに接続するような語りは確認できない。後のカフェー言説につながりうる発想をすくいあげるのが本章の目的である。

まずは、1910 年代に、カフェーが大衆にどのような場所として認識されていたのかを、確認したい。『中央公論』の 1918 年 9 月号では、「新時代流行の象徴として観たる『自動車』と『活動写真』と『カフェー』の印象」という特集記事が企画され、文筆家の所感が 30 頁にわたって掲載された。寄稿者は、柳澤健、小杉未醒、柴田勝衛、佐藤春夫、正宗得三郎、田中純、菊池寛、石井柏亭、江口渙、長田幹彦、坪内士行、久保田万太郎、小山内薫、谷崎潤一郎の計 14 名である。タイトルからも、この時期には、カフェーが自動車と活動写真に並んで流行現象として取り上げられるほど注目を集めていたことがわかる。

寄稿された文章のカフェーに対する言及の中で、頻繁に登場するのが次の三つの観点である。第一に、カフェーが食事を主目的とせず気軽に立ち寄れる飲食空間であること。柴田勝衛はカフェーが「半日の或は一日の労働の疲れを癒すに足る、手近かな休憩場」として機能し、「珈琲そのものでは無くして、カフェーに於ける気分それ自身」が「僕等の活動力を助けて呉れる」と評する（73)。

第二に、欧米のカフェーと日本のカフェーの比較。正宗得三郎は「巴里の『カフェ』から見れば、日本の『カフェ』は、『カフェ』の感じがしない」、「外国にあるほんの一杯のみの渇を湿する立飲み『カフェ』に比しては這入るに不便である」と日本のカフェーを批判している(77-8)。

第三に、カフェーで働く女性について。この点については、対立する二つの見方が示されている。女性を目当てに男性客が集まるカフェーに対して嫌悪感を示しているのが、菊池寛と石

井柏亭である。それぞれ、菊池は「カフエーの美しいウェイトレスなどが、凡てのお客様は自分の容色に引かされて来たものだと獨ぎめをして居るやうな様子をし居るのが一番嫌だ」(82)と述べ、石井は「小綺麗な給仕女の居るやうなカフェーには変な常連が出来てゐる」ゆえに、「日本のカフェーの印象は大体に於て甚不愉快なものである」と述べている(84)。

他方、藝妓を引き合いにカフェーの女性を好意的に受け止めるのが江口渙と長田幹彦である。江口は「素人から直ぐにウエートレスになつた女が多いためか、割合にすれつかれしが少」く、「相手をしてゐても気持が好い」と述べ、続けて藝妓の大部分が「低能化」したことが若い人々を「カッフエのウエートレスに追ひやる原因の一つ」であると分析している(86-7)。江口にとってカフェーの魅力は、素人に近い女性と交流ができることであった。長田も同じように「藝妓遊び」が「近き将来に亡びてしまふ運命をもつてゐる」一方で、カフェーには「栄えてゆくべき性質」があるとしたうえで、その魅力を次のように語っている(89)。

> 近代の都市生活は例の手ッ取早さの要求から、現在の花柳界のやうな伝統の多い、多分の金の要る娯楽機関から離れてゆく。明るい燈火の輝く美々しい建物のなかで、強い酒を呷りながら妖艶な装飾を凝らした女給に戯れ、短時間の間に生活の労苦を忘れ、或種の餓ゑを医する。(89)

花柳界は伝統が多く金もかかるが、カフェーでは、近代的な建物のなかで「妖艶な」女性と遊ぶことができるうえ、「手ッ取り早」い。長田が非日常的な空間で女性と戯れられることにカフェーの魅力を見出していたことがわかる記述である。つまり、カフェーの魅力として語られるのは、近代性や華々しさ、酒、女性がより合わさって成り立つ雰囲気であったとまとめられよう。

続いて、こうしたカフェーがどのような問題系の中で語られていたかという点を確認したい。関東大震災以前からカフェーに注目し発信を行っていた文筆家の一人として、新聞記者の松崎天民が挙げられる。松崎は明治末から昭和初期にかけて多くのルポルタージュを執筆した。大正期だけでも 15 以上の著作を発表し、割かれる紙面の量に差はあれど、そのほとんどでカフェーについて言及している。松崎は『淪落の女』(磯部甲陽堂・1912 年)において、私娼と藝妓について論じる中で、カフェーを引き合いに出して以下のように述べている。

> 美しい女の居る、カフエーが出来たり、バーが出来たり、レストランが出来たりして、夜を遊ばんとする一部の男に、欧米の近代素を提供する一面には、春を売る藝妓の群よりも、より軽便にしてより露骨なる私娼の群が、今や東京全市の外を包囲し、内に充実しつゝある。(松崎 1912: 207)

カフェーやバー、レストランが日本に近代性をもたらしている一方で、東京では藝妓よりも「より軽便にしてより露骨なる」私娼が拡大しているという指摘である。ここでいう私娼とは、

浅草「十二階下」に代表される銘酒屋街で性売買に従事する女性のことである[8]。「美しい女の居る」場所として説明されているとおり、松崎にとって女性が働いていることがカフェーの魅力の一つであった。つまり、この引用箇所では、カフェー、バー、レストランと遊郭、銘酒屋を、同じ女性が働いている場所として一度くくったうえで、性売買のないカフェー、バー、レストランと性売買が行われている遊郭、銘酒屋を対比させているのである。

さて同様の対比を、雑誌記事からも読み取ることができる。『婦人公論』（1916 年発刊・中央公論社）では、1916 年 1 月から 12 月にかけて、「女子職業調べ」と題して毎号女性の職業が紹介された[9]。取り上げられた職業は、電話交換手、看護婦、女教師、女医、女中、女店員、婦人記者、藝妓、カフエー女、モデル女、女優である。「カフエー女」は 9 月号で取り上げられている。

当該記事では、「人生の旅路は刹那の歓楽、瞬間の享楽に其意義を見出す」としたうえで、「万事は手軽で、安直で、さうして十分に生の目的を達するやうな――それが近代人の願であり要求である」と述べられている。そして「其近代人の願と要求とに応じて起つたのが近頃其処にも此処にも開店のカフエーであり、バアである」とされる。そして歓楽や手軽さを求める「近代人」の要求に従って生まれたカフェーにおいては、そこで働く女性もまた「近代的産物」であり、「昔風の女」では「近代的享楽的気分の漂つてゐる」カフェーで、「近代人の特色を発揮した酔つぱらひの近代男」を相手にすることはできないと説明されている（65-7）。

近代性や歓楽という語でカフェーを語る点は、松崎と共通しているがそれだけではない。女性がカフェーで働くことになる経緯について、記事ではこのように述べられている。

> 国を出る時には天晴一廉の女にならうとして上京したものもあらう。それが斯ういふ途を辿るに至つたのは勿論都の風の誘惑に相違ないが、若し銘酒屋女が直接の誘惑を受けたものとすれば、カフエー女は寧ろ精神的誘惑を受けた者と言ふことが出来る。（67-8）

「都の風の誘惑」にあてられた女性のうち、「銘酒屋女」になるのは「直接の誘惑を受けたもの」であり、「カフエー女」になるのは「精神的誘惑を受けた者」であるとされている。ここでいう「銘酒屋女」は、十二階下のような銘酒屋街で働く私娼であると理解できる。「直接の誘惑」と「精神的誘惑」が何を指しているのかは明記されていないが、松崎の記述と同様に、当該記事もカフェーと銘酒屋を一度「都の風」に誘惑されたものとしてくくったうえで、対比させるものである。

ここでは、カフェーを銘酒屋や遊郭などの性売買が行われている場所に対置するという発想が、1910 年代の時点ですでに形成されていたという点に着目したい。つまりカフェーを「恋愛

---

[8] 銘酒屋街では公娼制度に管理されない形での性売買が行われ、大正から昭和初期にかけて、「『前近代的』な遊興システムを否定し始めた大衆を取り込んで」、遊郭にはない「簡潔さ」「安価さ」を売りに繁栄することになった（寺澤 2022: 86）。

[9] 10 月号を除く。

の場」として位置づける言説は、常に遊郭や銘酒屋街との比較によって成り立っているのである。

本稿冒頭で述べたように、これまでの先行研究においては、カフェーの流行の理由として疑似恋愛が提供されていたことが指摘されている。寺澤は、昭和初期のカフェー言説を分析し、「『露骨な売春』がカフェーの流行の根幹になったのではなく、むしろ『露骨な売春』に及ばない曖昧さやそこに至るまでの『疑似恋愛』が主体であって、それこそが芸娼妓や酌婦とは違う新たな流行をみせた主要因であった」（寺澤 2022: 233）と結論づけている[10]。小関も、松崎の1920年時点での記述を参照しながら、「客たちはカフェーの女性たちとの疑似恋愛を楽しんでいるのであり、そのことがカフェーの来店促進につながっている」と分析している。

たしかに寺澤と小関が指摘しているように、少なくとも 1920 年以降は、カフェーを恋愛の場として語る言説を確認することができる。しかし、カフェーが最初から「疑似恋愛」の場として語られていたわけではない。例えば、松崎は 1915 年に出版した『恋と名と金と』（弘学館）において、カフェーの女性について「若い美しい女だもの、恋物語の一節や二節は、その過ぎ来し方のページにあらう」（松崎 1915: 175）と述べているが、これはあくまで女性がカフェーで恋愛をする可能性を認めているだけであって、カフェーでの恋愛が売り物のようになっていたという主張ではない。

そもそも「恋愛」という概念も、カフェーの拡大とほぼ同時期に、日本に定着していったものである。つまり、カフェーを遊郭や銘酒屋と対比するという発想は、カフェーが恋愛の場として明確に観念されるようになることに先立っていた。後の時代にカフェーを恋愛の場として定位する論理の柱となるのは、カフェーは遊郭とは異なるという発想であり、この同種の発想を、黎明期のカフェー言説に認めることができるのである。

本章では、後の「カフェー＝恋愛」言説につながりうる発想を抽出することを目的に、1910年代のカフェー言説を分析した。1911 年に産声を上げたカフェーは、近代性や華々しさ、酒、女性がより合わさって成り立つ雰囲気に魅力を認められていた。松崎のカフェーに対する言及と、『婦人公論』の「女子職業調べ」から確認したのは、カフェーが銘酒屋や遊郭に対置されていたことである。そして、こうした発想は、後にカフェーが恋愛の場として語られる際の土台となっていくのである。

---

[10] 寺澤は、カフェーで疑似恋愛が提供されていたことの根拠の一つとして、木谷絹子の『女給日記』（金星堂・1930 年）という小説において、主人公の女給と客の恋愛が描かれていることを挙げている（寺澤 2022: 231-2）。カフェーと恋愛の結びつき自体は否定されるものではないが、小説作品で描かれている内容から現実世界の実態を導出することには、慎重になる必要があるだろう。『女給日記』はあくまでフィクションであるため、そのまま現実世界が反映されているわけではない。どちらかといえば、小説で描かれるほど、カフェーと恋愛を結び付ける発想が強固であったことに目を向けるべきであろう。

第２章　青年のカフェー通いという社会問題

本章の目的は、1910 年代にあったカフェを遊郭や銘酒屋に対比させるという発想が、どのような回路で恋愛に接続されていくのかを明らかにすることである。そのために、1920 年代のカフェー言説を取り上げる。特に「カフェー＝恋愛」言説の成立に大きく寄与したと考えられる青年問題に着目する。

大正時代の目をひく出来事として、確認しておかなければならないのが恋愛論の流行である。その嚆矢となったのが、1921 年に『東京朝日新聞』紙上で連載され、一部加筆後、単著としてまとめられることになった厨川白村の『近代の恋愛観』（改造社・1922 年）である。「ラブ・イズ・ベスト」と名づけられた章から始まる同書は、「見合結婚」が「個人の自由を奪ふ」「悪習」であることを喝破し、恋愛を伴う結婚の重要性を説いた（厨川 1922: 226）。以後、大正時代には多くの恋愛論が発表され、ブームの様相を呈することになる。

恋愛論は、「恋愛」という概念をどのように論じたのだろうか。岩見照代は、厨川の恋愛論は全く新しい発想を大衆にもたらしたのではなく、すでに大衆に存在していた問題関心と同じ方向を向いていたものであったとしている（岩見 2014: 440-1）。寺澤もこの指摘を引き継ぎ、大正時代の恋愛論は、一部の知識人が展開する実態と乖離した理想論ではなく、「広く民衆に対しても普遍性を持ったもの」であり、それに「学問的価値を付与して広く知らしめた」論説であったとする（寺澤 2022: 183）。ここでいう学問的価値とは何か。

最も正鵠を射た指摘をしているのが、恋愛論と情死スキャンダルの多発に着目した菅野聡美の分析である。菅野は、大正期の情死事件報道の特徴を、事件の背景や既成道徳、婚姻制度にまで議論が及ぶ点に見出し、「続発する恋愛事件は一般の人々に恋愛にたいする関心を呼び起こすと同時に、その恋愛を疎外する社会状況を普遍的な問題として考えさせる基盤を創出した」（菅野 2001: 27）と説明している。この基盤が、恋愛論の流行を後押ししたのだという。事実、厨川は情死事件の一つを取り上げ、次のように述べている。

> 人生の最も普通な現象なればこそ、真に人生を観照し感味しようとする者の深く考へねばならぬ事柄である。Hといふ一少女の自殺事件の中には、現代に生きる何人と雖も無関心であり得ない多くの問題が含まれて居た。そこには近代人の何人にも味はるべき社会苦と人間苦と、そして懊悩と苦悶とが、暗い影を投じて居たのである。（厨川 1922: 59）

恋愛が誰にでも起こりうる現象であるからこそ、それに附随する苦しみについて真摯に考えなければいけない。個人の問題ではなく、「社会苦」として受け止め、社会の問題として論じていかなければならない。このように、大衆が個人的なものとして経験していた恋愛を、学問的に社会の問題として提起するのが、大正時代に流行現象となった恋愛論であった。

恋愛への関心が高まっていくのと同時並行的に、カフェー言説のなかにも恋愛という語が確認されるようになる。第 1 章で言及した松崎天民は、1920 年出版の『女人崇拝』（精禾堂）において「藝妓や娼妓の他に私娼と云ふ一つの階級が、今も尚ほ男性の性欲生活に、蔑り難い対象機関となつて居る」（松崎 1920: 68）と述べる。これに対して、「カフエーの女は、売笑婦で

はありません。金銭に依つて購はれ、その貞操を二三にすべき性質の職業女ではありません」（同: 192）と、藝娼妓や私娼とカフェーの女性を区別している。そして、男性客がカフェーに赴く理由をこのように説明している。

> 僅に一杯のコーヒーを購ふ代償に依つて、容易に、簡単に、彼等の一顰一笑に浴する事が出来るのは、若い男性にとつての大なる喜びに違ひありません。そして一般的には、疑似性欲的快感に浸る事が出来る上に、特殊の対人関係としては、恋愛状態に進み得べき可能性があります。そこがカフエーの女に見る力強い存在価値でして、同時にカフエーの女が、堕落し易い危険性を帯びて居る所以であると云ひ得ませう。（同: 192-3）

カフェーにおいては「疑似性欲的快感」が味わえるだけでなく、「恋愛状態」に進みうる可能性があり、男性客にとってはそれこそがカフェーの女性の存在価値であると述べられている。つまり、カフェーを明確に恋愛の場として定位する記述である。第 1 章で確認した黎明期の言説では、カフェーは精神的、歓楽的といった言葉で表現されていたが、カフェの誕生から 8 年、カフェーは恋愛の場としての地位を固め始めることになる。

もう一点、着目したいのが、カフェーにおいて女性と交流することに「大なる喜び」を感じるのは、若い男性であるとされていることである。カフェーが恋愛の場として語られるとき、その中心にあったのは青少年であった。

1923 年の関東大震災後、東京のカフェーはその軒数を増やして行くことになるが、その中で学生がカフェーに出入りすることが社会問題として取り上げられるようになる。1925 年 4 月 29 日の『東京朝日新聞』夕刊には「カフエーから生れる近頃の学生犯罪 最も安価な酒と女の供給に 今や全く不良団の巣」（第 2 面）という題の記事が掲載されている。学生街にカフェーが増加していることを紹介し、「学生の堕落や犯罪がカフエーを中心として発生される」と、カフェーによって学生の風紀が乱れることを問題として取り上げるものである。

さて当該記事においては、学生が犯罪を起こすのは「女の歓心をかふため」であると説明され、カフェーで働く女給の借金を払うために強盗を働いた学生や、カフェーでの飲食費に困って泥棒や詐欺を働く学生の事例が紹介されている。「簡易な酒と女の提供所であるカフエーは、犯罪学生になくてはならぬ一つの要件化して了つた」とされ、末尾は学校と家庭が十分に注意していく必要があるという警句でしめられている。恋愛という語こそ用いられていないものの、カフェーにおける若い男女の交流が問題視されるようになったことが読みとれる。

同記事は学生とカフェーにまつわる表層化した問題を紹介するものであるが、この問題が論じられるとき、どこに問題の所在が見出されたのか。同年、『中央公論』の 7 月号には、「学生のカフエー入りとカフエー女給の研究」という特集に、5 名の文筆家が文章を寄せている。寄稿者は掲載順に、宇野浩二、小川未明、谷崎精二、長田秀雄、豊島与志雄である。特集が企画されていること自体からも、カフェーと学生というテーマが注目されていたことをうかがい知れよう。

5 名のうち、宇野、小川、谷崎は学生のカフェー通いについて比較的寛容な立場をとっており、長田と豊島は批判的な立場をとっている。とりわけ豊島は女給が看板となっているカフェ

ーに対する嫌悪感を明らかにする。曰く、東京のカフェーにはいるとき、「木陰に立寄つたり焚火に近寄つたりする、さういふ自然な無関心さとは、よほど違つた心遣ひを客に起させる」が、これは「女給のせい」である。「べちやべちやとよく饒舌る」、「ぢろぢろと流し目を使ふ」、「娼婦式の冗談で客をあやなす」といった女給のしぐさが、「カフエーの中の空気を、蝿のやうにかき乱す」ことによって、カフェーが「安楽な街路の休息所」として成立することを妨げているという。豊島は、学生はこうしたカフェーで「蝿の群の中に身を投じて踊りはねること」を好むが、それは「さういふ情意の運動が、彼等の心を爽快になす」からであると論じ、学生向けのカフェーとそうでない者向けのカフェーを分けるべきであると結論づけている（135-6）。

対して、学生に一定の理解を示しているのが谷崎である。谷崎は女給に恋をして結婚を申し込んだ知り合いの学生を紹介し、紳士的な態度でカフェーにおける女性との交流に臨むのであれば、それが非難されるべきではないと主張する（130-1）。ただし、谷崎も豊島と同様に「学生向」と「紳士向」のカフェーがあるということを認めている（128）。

さて、学生がカフェーに通うことに対して批判的な者も肯定的な者も、学生向けのカフェーとそうでない者のためのカフェーを二つに分けて考えている。つまりここでは、若者とそうでない者では、カフェーに通う目的が違うという前提が共有されている。この点が重要である。カフェーが論じ語られるとき、当然のごとく言及されるのがカフェーに人が集まる理由である。その答えが異なれば、必然的にカフェーがどのような場所として定位されるのかも変わる。「若者がカフェーに通うのはなぜか」という問いが立てられたこと自体が、カフェーをとり巻く言説の水路を形成していくのである。

当該特集では若者のカフェー通いにどのような理由が与えられていたのか。まず宇野は、「藝者や女中とは縁の遠い我々貧乏学生にとつて、五銭の珈琲を飲みに入つたら、女と話が出来るといふだけでも十分歓迎すべき価値があつた」（120）と、自身の学生時代を振り返り、安価に女性と会話ができることがカフェーの魅力であったと語っている。続く小川も同様に、「青年等が、最も自由に異性と交際し、談笑することを得るカフエーに赴くのは、不思議はないことです」（127）と、学生のカフェー通いの理由を自由な異性交際に求めている。

長田は「現代の青年男女の悩みは結婚難である」と述べたうえで、「既に成熟したしかももつとも官能の鋭敏な青春時代の男性が、配偶者なしに暮らして行かなければならない」という状況が、異性を求める男性をカフェーやダンス場に向かわせると説明している。ここでは配偶者の不在が青年のカフェー通いの原因である（134）。

いずれにせよ、青年がカフェーを訪れる理由は、異性との交流を求めるためとされている。その裏にあるとされるのが、未婚の男女が交流できる場の不足である。何より重要なのは、この答えが「若者がカフェーに通うのはなぜか」という問いから導き出されているということである。既婚の男性が訪れる場としてカフェーが語られる限りは、未婚男女の交流の場としてカフェーが定位されることはない。第１章で確認したように、近代性、華々しさ、雰囲気などがカフェーを説明する際の常套句となろう。しかし、カフェーが若者の問題として立ち上がれば、必然的にそこに男女交際や恋愛といった語が忍び込むことになるのである。

本章では、1920年代前半のカフェー言説を確認した。大正時代には恋愛論ブームが勃興したが、これと同時期に松崎は若者にとってのカフェーの魅力が、女給と恋愛に至る可能性のあることであると説明している。第1章で確認したように、1910年代には、カフェーを遊郭や銘酒屋と対比させるという認識枠組みが成立していた。1920年代には、その先に恋愛という言葉が用意されるようになったのである。そして、『中央公論』の特集記事では、カフェーを訪れる目的が若者とそれ以外とで異なっているという発想を確認した。「若者がカフェーに通うのはなぜか」という問いが発せられたことによって、その答えとしてカフェーが恋愛の場であるという意味づけがもたらされたのである。

第3章　素人として欲望される女給

これまでの検討では、カフェーを遊郭や銘酒屋と対比させるという発想を土台として、1920年代前半からカフェーが恋愛の場として語られ始めたことを確認した。本章では1920年代後半のカフェ言説を取り上げる。分析に先立ち、問題意識を確認したい。

カフェーが恋愛の場として論じられるときに、共通して説明されるのは女給の自由さである。娼妓と異なり、女給には肉体関係を持たない自由があるために、客はそこに恋愛的なものを感じることができるという論理である。本稿冒頭で取り上げた社会評論家の室伏は、女給が「奴隷的」に性を売買する必要がないがゆえに、カフェーが「自由恋愛」の場として成立していると説明していた。その他、恋愛に関するいくつかの著作を発表している宇高寧も、カフェーでは「全てに於て自由の形式が採られて」おり、「男性が彼女等に集る心理的原因は花柳界のやうに金で買つたり買はれたりする事なく、少くとも表面恋愛中心であるから興味をそゝられるのである」（宇高 1929: 282）と、室伏と同様の結論を導いている。

寺澤はこうした言説に依拠する形で、恋愛の楽しみが、「本人の『意思』によって就業した女給との個人対個人の交渉による『疑似恋愛』とその延長線上にある性交渉のなかに存在しえたのである」（寺澤 2022: 246）と述べている。そして、「疑似恋愛」が男性客にもたらした「正当性」について、以下のように述べる。

> 人身売買によって身売りされ、奴隷的労働を強いられていたとされている芸娼妓とは「恋愛」関係が成り立たない。しかし、経済的背景に左右されていたとはいえ、一応の「自由」と「意思」を有する女給とは「恋愛」が成立することになるのである。そしてその延長線上にある性交渉も必ずしも「罪悪」とはならず、むしろ新しい価値観のなかでは「正当なもの」となりうるのである。（同: 244）

条件付きであれ「自由」と「意思」があれば「恋愛」が成立し、新しい価値観である「恋愛」は、女給との性交渉も「正当なもの」にしうる。すなわち、「恋愛」が女給との性交渉にともなう「罪悪」をなくす免罪符として機能したという主張である。しかし、恋愛が免罪符となっていたことは、男性客をカフェーに集める誘因力の説明としては不充分であるように思われる。

この後確認するように、カフェーの女給が経済的に自由でなかったという事実は一定程度周知されていた。その状況では、カフェーで執り行われる「疑似恋愛」が、真の意味での「恋愛」として、受け取られてはいなかったことは容易く想像できる。なるほど「恋愛」という言葉や概念が同時代においてそれだけ力を持っていたのだ、と説明することもできようが、むしろ「恋愛」という語自体を大切にするのであればこそ、恋愛と分かちがたく結びついているべき自由がそこにはなかったということが、不都合な事実として立ち現れてしまうのではないか。不都合な事実に対して目をつぶっていたことを批判するだけでなく、何がカフェーの誘因力となり、目をつぶらせたのかを明らかにする必要があるだろう。本章では、「恋愛」の流行という理由だけでは説明できない、カフェの誘因力の一端を明らかにする。

まずは女給の自由に関して、どのような言説が存在しているのかを確認したい。学生のカフェーへの出入りが社会問題化したことを背景にして、1925 年 7 月、行政による大規模調査が実施された[11]。調査は翌年に『職業婦人調査 女給』（中央職業紹介事務局・1925 年）として刊行されている。同書冒頭では、「不良少年、学生の多くの犯罪が此のカフエーを背景に頻々として起こりつゝあること」が「当面の重大なる社会問題」であり、「渦中にある所謂女給の実相を知ること」が「目下の急務である」と、調査の目的が説明されている（中央職業紹介事務局 1925: 1-2）。この記述からは、問題の焦点が、「カフェー」という場そのものから、そこで働く「女給」へと絞り込まれていることを読みとれよう。

斎藤光は、「『女給』という言葉やコンセプトが、カフェーと結びつきながら世の中に広まっていく」のが 1920 年代であったと説明している（斎藤 2020: 80）。カフェーでの恋愛に着目するとき、そこで働く女給に関する語りが増えていったことは重要である。カフェーの雰囲気を味わうだけであれば、女給は花を添える存在に過ぎないが、女給を相手に恋愛を実践しようとするならば、女給の実態や女給が何を考えているのかという論点がおのずと浮かび上がってくるからである。もちろん、同調査は行政が社会問題解決のために実施したものであり、恋愛を希求する男性の要望に応えて行われたものではない。そこで同調査を取り上げるにあたっては、調査が他の論者にどのように参照されていくか、そして調査結果がどのような女給像を喚起しうるかという点に着目したい。

調査は大阪と東京の二拠点を対象に実施された。女給への設問が記された調査票を事前に配布し、後日回収するという形式が採用され、東京 1,847 件、大阪 1,115 件の計 2,962 件の回答が集まっている。設問は、勤務先、年齢、両親・兄弟の状況、出身地、育った地域、上京（上阪）の時期及び理由、前職、就業時期、理由、職場を変更した回数及び勤続年数、起床・就寝時刻、収入、支出に加え、自由記述欄として、今の職業の良いところ・悪いところ、将来についての考えの二点が用意されていた。

回答の中でまず目を引くのは、「好奇心によりて」という理由が挙げられている点であろう。「興味ありて」「好きで」「一時の出来心で」「享楽を追つて」の他、「カフエの裏面を研究せん

[11] 本稿では社会問題化による警察の取締りについては中心的に言及しない。本稿の主題が、「恋愛」などの女給やカフェーに対して必ずしも否定的ではない言説を問題化することにあるためである。

と思ひ立ちて」「女給研究のために」「社会見学のために」などが挙げられ、これらは「職を選ぶ際に自ら進んで興味を持つて入つた」者たちであると説明されている（中央職業紹介事務局 1925: 51）。ただし、調査の結論としては、「常識的に考へて経済的理由によるもの（震災の為、家計補助、扶養の為、自活の為、嫁入支度の為、収入多き為、一時的の生活の為、他に職なき為、同業開店の為、学費を得る為、離婚の為）が合わせて全体の七割二分弱で、然らざるものが二割八分強である」と、経済的な理由での就業が多いことが示されている。

調査以前から、「カフエーの女給たらんとする女性は、多く家庭が貧しく—或は又貧しくはなくとも、突然に都へ飛び出して、食ふに困つてなる者も少くない」（石角 1924: 158）というように、経済的理由が女給の就業理由として説明されることは多かったため、同調査は改めてこれを数量的に証拠づけるものであったといえる。

行政による調査は後に刊行された書物でも度々引用されることになった（有明 1929: 77-92; 村嶋 1929a: 80-96）。とりわけ村嶋帰之[12]は貧困による就業に同情的で、これが「誤れる現代の社会組織の所産である」と社会主義者としての立場から現代社会を批判している。1920 年代後半には、女給が経済的な理由から職を選んでいるという実態は、ある程度の共通認識になっていたと結論づけることができる。寺澤が指摘しているように、藝娼妓と比べた際に、女給が就業理由や労働形態に関して一定程度の自由が認められていたことは事実であろう。ただしその一方で、経済的には決して自由ではない、という認識もまた、数量的なデータに基づいて周知されていたとみなすことができるのである。

同調査が明らかにするのは、カフェーで行われているのは「自由恋愛」であるという言い訳が、免罪符として十分に機能していなかった可能性である。それでもなお男性客をカフェーに集めた誘因力とは何だったのだろうか。女給の貞操に関する記述を確認したい。

『職業婦人調査 女給』では、肉体関係を持とうとする男性客へ、憤りを表明する女給の声がいくつか紹介されている。「日毎に変る客の多くは飲食は二の次で狼の様に弱味につけ込んで女の貞操を弄ばんとするもの許り、之が情ない」（中央職業紹介事務局 1925: 143）、「未婚の女としては何所迄も処女の誇を失はせたくない、操は貴い、それだのに客の多くは此の弱い女を自由にしてやろうとして金に、言葉に、あらゆる手段を講じて餓えたる狼の如く寄りたかつて来る」（同: 145）など、自身が貞操を守りたいという意志とそれを侵そうとする男性客への不満が述べられていることを確認することができる。

他の出版物においても、女給ではあるが貞操は守りたいという声は頻繁に紹介されている（松崎 1927: 211; 有明 1929: 124）。経済的にやむを得ず女給になった、貞操を守りたいと思

---

[12] 村嶋帰之は、大正・昭和期にジャーナリスト、ルポルタージュ作家、労働運動家として活躍した（1891-1965）。1914 年に早稲田大学政治経済学科を卒業した後、大阪毎日新聞社に入社。貧困問題や労働問題に関する論考を著述している他、労働運動にも携わる。1924 年に受洗。学生時代から労働問題に関心を寄せていた一方で、大阪朝日新聞社に入社後は、花柳界に耽溺していった。社会主義者としての活動と花柳界遊びの間の矛盾に苦しんだが、1920 年代後半に遊興から決別し、以後廃娼論を積極的に唱えることとなった。村嶋が花柳界遊びで感じた悦び・葛藤が、廃娼論へと変容していくプロセスは、寺澤の研究に詳しい（寺澤 2022: 150-81）。なお、本稿の村嶋に関する概説も、寺澤の記述に依拠している。

っているという語りは、「不良少年の根拠地がカフエーである」「女給の大体が或一種の真面目を欠いた者がかなりある」（前田 1927: 130）といった、真面目な女性とカフェーの女給との差異を強調する言説に対して、むしろ普通の女性と変わらない存在としての女給像を喚起するものである。

これと同様の語りが、婦人雑誌における女給の身の上話記事にも記されている。1920 年代後半の『主婦の友』（主婦の友社・1917 年創刊）では、女給の身の上話が度々掲載されていた。細かい点で違いはあるものの、これらは基本的には類似した構造の物語である。類似点を挙げれば、第一に、それが実際のできごとであることが強調されている点。身の上話にはタイトルの他、主役となった女性の名前が記されていた。例えば、1929 年 11 月号には「色魔に騙された女給の結婚哀話 田舎出の若き娘が都会で失敗した経験」という記事が掲載されているが、タイトルの横には「山根鈴子」という名前が記載されている。物語がフィクションであるか否かにかかわらず、署名が付されていることは、記事の真実味を補強する役割があったと考えられる。署名がない記事であっても、それが真実であることが強調されていた。1926 年 4 月号掲載の「女給と女優を志願した記者の記録」では、冒頭に「実例を記者が親しく調べて見ましたから、こゝに有りの儘を御紹介いたします」という一文が添えられている（85）。

第二に、女給になる原因となった経済的困窮が悲嘆的なトーンで語られている点。1925 年 2 月号「幼い弟妹達のために訓導から女給になつて働く若い婦人」では、夫を亡くして困窮した女性が、子を養うために女給となって働くまでの過程が記述されている。同記事の後半において、「か弱い女の腕で、一家七人を養はなければならなかつた、すて子未亡人の今日までは、苦闘の歴史、涙の記録であります」と、女性の悲劇性が強調されているが、これも典型的に他の身の上話にみられるものである（2-3）。

第三に、貞操を守ろうとする意志が明確に示されている点。1924 年 9 月号掲載の「女給となつて働く若き姉妹 一家生計の資を得るために悲しくも身を落して」（6-9）は、関東大震災をきっかけに経済的に困窮した姉妹の、女給になるまでの過程とその後の生活を悲劇的に記した物語である。ここでは、「誘惑」に負けまいとする女性の決意が以下のように示されている。

> かうして心ならずも酒と唄に、忌はしい不規律な生活を送つてをります間には、種々雑多の手段を以て、女の弱点に喰ひ込まうとする誘惑の手もありました。けれども私達姉妹には堅い決心がありますので、異性からのどんな誘惑も、少しも恐ろしくはありませんでした。（9）

女給生活には「女の弱点に喰ひ込まうとする誘惑の手」が多かったが、そうした異性からの誘惑には屈しなかった。このように、貞操を失うまいとする女性も典型的に描かれるものである。

まとめれば、『主婦の友』に繰り返し掲載された女給の身の上話は、経済的な理由で女給となった女性が貞操を守りたいと願いながら働く様を、実際に起こった悲劇として描くものであった。これらはフィクションである可能性をぬぐい切れない。また、貞操を失うまいとする女性が描かれることには、「貞操を守るべきである」という教育的な側面もあったと考えれる。

婦人雑誌の身の上話記事で提示される女給像と、社会調査や社会批判の文脈で語られる女給像には共通点を見出すことができる。女給として働いてはいるが、一般女性と変わらず貞操を大切にしている、つまり普通の女性としての女給である。

普通の女性であるにもかかわらず、仕方なく女給として働いているという物語は、女給の自由さを否定するため、自由恋愛を希求する男性にとって不都合である。しかし、むしろそれがカフェーの誘因力につながっていた。先にも引用した村嶋を再び参照したい。村嶋は、カフェーが人気を集めた理由について、女給が「素人的」であったことに言及している。

> 藝妓と対座してゐる時、人々は、職業的な女と在る心地を覚えるが、女給と在る時は、素人の、しかも処女、令嬢と対してゐるかの感がある。現代の青年は、職業的な藝妓よりも、むしろ非職業的に見えゐる女給を望む。処女若くは処女性を失はずに見えゐる女性が、若き男子を、より吸引するのだ。思ひ切り赤い緋の帯上げを、牡丹の花のやうに帯の上に見せるのも、乳房を圧して胸高に結ぶ帯も、振の袖からこぼれる紅の長襦袢も、みな、この処女性を求める客の心理に投じようとしての事だ。そこで、客はその美しき女給を喰べようと、喜び勇んでカフエーの暖簾をくゞるのである〔傍点ママ〕。（村嶋 1929a: 50）

青年が藝妓ではなく女給を求めるのは、素人的であり、非職業的であり、処女性を感じられるからであるという。なぜ素人的であることが必要なのか。

村嶋はカフェーが人気を集めている理由を「恋愛気分」が味わえるためと説明している（同: 11）。ただし、村嶋のいう恋愛は同時代に希求されていた自由意志を伴う「恋愛」とは異なっている。

> 恋愛は男にとつては遊戯的部分が多いのだ。女を征服して、その征服感を味へばそれで善い。興はそのプロセスに係つてゐる。彼等は幾許かの投資をした後、彼女の心を動かし得たりと信じた時に、女給に向つて外出をすゝめる。行先は旅館か、温泉かであらう。（村嶋 1929a: 135）

村嶋にとって男性の恋愛は「遊戯的」であり、女性を征服するプロセスによって「征服感」を味わうものである。ここでは「恋愛」が免罪符になることはない。女給の自由意志による恋愛があるからカフェーに人が集まるのではなく、むしろ自由とは対立するような「征服」を味わえるからこそ、男性客が集うのである。

「征服」を求める男性客にとって、女給が「素人的」であることは好都合である。藝娼妓のような「玄人」が男性客との性交渉を拒めない一方で、女給のような「素人」は貞操を守ろうとしている。守ろうとしているからこそ、男性客は女給を征服し、「征服感」を味わうことができるのである。自由意志による恋愛の希求とは遠く離れた「征服」のプロセスこそが、カフェーの誘因力になったのではないか。

本章ではまず、女給の経済的な不自由さが周知されていたという事実を確認した。不自由さが周知されているならば、女給との性交渉を「自由恋愛」の名のもとに正当化するのは難しか

ったことだろう。しかし、征服のプロセスを味わうという目的があったがゆえに、たとえ「自由恋愛」という免罪符が完全に機能していなかったとしても、カフェーには男性客が集まったのである。

おわりに

本稿は、カフェーにおける「疑似恋愛」を、女給に働く強制力を不可視化するものとして取り上げ、批判した寺澤の成果を引き継ぎながら、女給への強制力を不可視化してしまう、カフェーが恋愛の場であるという発想が、どのように成立したのかをより深く検討するものであった。論点としては以下の二点を提示した。

第一に、カフェーを恋愛の場とする言説はどのような過程を経て形成されたのか。第二に、カフェーが人気を集めたのは「恋愛」の希求だけで説明できるのか。

第一の論点について。カフェーは黎明期から遊郭や銘酒屋と対比され続けてきた。後年、カフェーにおいて恋愛が成立すると主張されるときにも、その構造は維持されていた。この対比構造が重要である。カフェーの女給には「自由」があるゆえに「恋愛」が成立している、という主張がされるとき、必ず対比されるのが遊郭の不自由さである。つまり、女給が自由であるという主張は、遊郭との対比なしには不可能なのである。カフェーと遊郭を対比するという発想が、女給に「自由」を、カフェーに「恋愛」を読み込むことを可能にしたのである。

第二の論点には第 3 章でこたえた。カフェーに男性客が集まったのは、「自由」という免罪符があったことの他、女給が藝妓に比べて素人的であり、それが男性の求める「征服」のプロセスに合致していたのである。無論、ここでいう「征服」は男性による女性の支配・抑圧を直接に意味するものではなく、男性が意中の女性を口説き、恋愛を成就させる際の慣用的な言い回しであったとも考えられる。しかし、「恋愛」という概念が定着した 1920 年代から 1930 年代において、「自由」という語に並んで、支配や抑圧を喚起する「征服」という語が、恋愛を語る際に用いられていたという点は重要である。

恋愛の要件とされていた「自由」は、男性が恋愛を享楽するプロセスにおいて、支配・抑圧への希求と隣接していた。つまり、女性の「自由」を重視しながら女性を「征服」しようとするという矛盾が、成立当初から「恋愛」概念に内包されていた。「自由」を読み込まれながら「征服」のプロセスを提供していたカフェーには、「恋愛」という語が含みこんでいた矛盾が色濃く映し出されているのである。

本稿の議論は、同時代の恋愛論で語られていた恋愛規範には収まりきらない、恋愛の享楽的側面を大正・昭和期のカフェーの分析から抽出するものであった。こうした享楽的側面及びにそれにまつわる矛盾が、現代の恋愛規範にどのように接続されていくのかを歴史的文脈から明らかにすることを今後の課題としたい。

《参考文献》
名前の後の括弧は同一著者、同年出版の資料を引用する際の表記を示す。

・一次文献（書籍）
松崎天民『淪落の女』磯部甲陽堂、1912 年。
松崎天民『恋と名と金と』弘学館、1915 年。
松崎天民『女人崇拝』精禾堂、1920 年。
厨川白村『近代の恋愛観』改造社、1922 年。
石角春洋『女性の急所』榎本書店、1924 年。
中央職業紹介事務局『職業婦人調査 女給』中央職業紹介事務局、1926 年。
前田誠孝『性的誘惑の種々相とその対策』南海書院、1927 年。
松崎天民『銀座』銀ぶらガイド社、1927 年。
有明暁『カフエ行進曲』新進社、1929 年。
宇高寧『女性恋愛展望』知命堂出版部、1929 年。
村嶋帰之（村嶋 1929a）『カフエー：歓楽の王宮』文化生活研究会、1929 年。
木谷絹子『女給日記』金星堂、1930 年。

・一次文献（雑誌）
一記者「女子職業調べ カフエー女」『婦人公論』中央公論社、1916 年 9 月号。
石井柏亭ほか「新時代流行の象徴として観たる『自動車』と『活動写真』と『カフェー』の印象」『中央公論』中央公論社、1918 年 9 月号。
木澤朝子「女給となつて働く若き姉妹」『主婦の友』主婦の友社、1924 年 9 月号。
婦人記者「幼い弟妹のために訓導から女給になつて働く若い婦人」『主婦の友』主婦の友社、1925 年 2 月号。
宇野浩二ほか「学生のカフエー入りとカフエー女給の研究」『中央公論』中央公論社、1925 年 7 月号。
婦人記者「女給と女優を志願した記者の記録」『主婦の友』主婦の友社、1926 年 4 月号。
村嶋帰之（村嶋 1929b）「大阪カフエー弾圧史」『中央公論』中央公論社、1929 年 2 月号。
室伏高信「カフエ社会学」『中央公論』中央公論社、1929 年 2 月号。
山根鈴子「色魔に騙された女給の結婚哀話」『主婦の友』主婦の友社、1929 年 11 月号。

・一次文献（新聞）
「カフエーから生れる近頃の学生犯罪 最も安価な酒と女の供給に今や全く不良団の巣」『東京朝日新聞』夕刊、1925 年 4 月 29 日。

・二次文献
岩見照代「解説」『「婦人雑誌」がつくる大正・昭和の女性像 第 5 巻 恋愛・結婚 5』ゆまに書房、2014 年。
小関孝子『夜の銀座史—明治・大正・昭和を生きた女給たち—』ミネルヴァ書房、2023 年。
小野沢あかね『近代日本社会と公娼制度 民衆史と国際関係史の視点から』吉川弘文館、2010 年。
菅野聡美『消費される恋愛論』青弓社、2001 年。
小谷野敦『日本売春史 遊行女婦からソープランドまで』新潮社、2007 年。
斎藤光『幻の「カフェー」時代 夜の京都のモダニズム』淡交社、2020 年。
篠原昌人『女給の社会史』芙蓉書房出版、2023 年。
田中亜衣子『男たち／女たちの恋愛—近代日本の「自己」とジェンダー—』勁草書房、2019 年。
寺澤優『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会—売買春・恋愛の近現代史—』有志舎、2022 年。
野口孝一『銀座カフェー興亡史』平凡社、2018 年。

藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、1997年。
山路勝彦「美人座物語：近代日本のカフェ文化（1）」『関西学院大学社会学部紀要』135、2020年。
———「女給が輝いていた昭和：近代日本のカフェ文化（2）」『関西学院大学社会学部紀要』136、2021年。
———「昭和の台湾（1）、洋装とファッション：近代日本のカフェ文化（3）」『関西学院大学社会学部紀要』137、2021年。
———「昭和の台湾（2）：近代化と植民地、消費文化と歓楽街の生成：近代日本のカフェ文化（4）」『関西学院大学社会学部紀要』138、2022年。
———「満州の歓楽街—エロスと規律権力：近代日本のカフェ文化（5）」『関西学院大学社会学部紀要』139、2022年。
———「植民地と近代、朝鮮1930年代：近代日本のカフェ文化（6）」『関西学院大学社会学部紀要』140、2023年。
和田博文「エッセイ・解題 関連年表・参考文献」『コレクション・モダン都市文化 第12巻 カフェ』ゆまに書房、2005年。

堀内 直央（ほりうち・なお）
立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻博士課程前期課程修了。修士（比較文明学）。近代日本における売買春や性科学などセクシュアリティに関わる事がらについて、人々の意識に焦点をあてながら、大衆向け雑誌等の分析・研究をすすめている。06270215hori@gmail.com